＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter

[No.2 2007/11/22]

海外の研究者からのGCOE発足への祝辞（フランス　ラスティエ氏）
平成19年度グローバルCOE論文賞の募集について
GCOE第２回国際研究集会の開催について
次回のオープンレクチャーについて
GCOE大学院生派遣事業について
第２回オープンレクチャーの要約
「テクスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約
GCOE研究合宿の報告

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ 海外の研究者からのGCOE発足への祝辞（フランス　ラスティエ氏）

皆様へ

このメッセージを皆様に送らせていただくのは私にとって喜びであり、光栄です。研究集会を通じて、また皆様の研究報告集、研究集会報告書を読ませていただき、テクストについての皆様の学際的研究が文化研究の現在の発展に対して重大な鍵を握るものであることを確信しました。

テクストは過去のものであるどころか、我々の目の前に存在します。インターネットの飛躍的な発展と電子化によって、社会的な要求はドキュメントの記号学を要請し、我々にとっては作品の解釈学によってドキュメントを分節化することが必要となっています。それは、書記システムや草稿の研究に至るまで「文の科学」と「精神の科学」を結合させるということです。こうしてテクストをめぐる一連の問題は、非言語的な「テクスト」に至るまで、即ち複雑な記号学的な所作全体にまで広がる新たな考察を招来することになります。

人文科学と社会科学の主要な対象は、共時的また通時的に意味を与える多様性のもとに、そして一般的かつ比較対照的な展望のもとに捉えられたテクストによって構成されるので、皆様のプログラムは文化の科学に固有のエピステモロジーを構築することに理論的かつ実践的に寄与することになります。

心よりご成功をお祈り申し上げます！

フランソワ･ラスティエ
パリ　フランス国立科学研究センター主任研究員

■ 平成19年度グローバルCOE論文賞の募集について

GCOEでは下記の要領で論文を募り、「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2008年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します．多くの方々の積極的なご応募を期待します。

詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。

http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/

■ GCOE第2回国際研究集会の開催について

『バルザック、フローベール―作品の生成と解釈の問題』

日時：2007年12月14日（金）～16日（日）
場所：名古屋大学文系総合館７F　カンファレンスホール
使用言語：フランス語　日本語（同時通訳付き）

詳しくはグローバルCOEのWebサイトにアクセスして、研究活動＞国際研究集会をご覧ください。

■ 次回のオープンレクチャーについて

2007年12月12日（水）18：00～　国際センタービル15F GCOEオフィス
講演者：ピエール＝ルイ・レ（パリ第三大学教授）
「『三つの物語』は、フローベール作品における幕間劇なのか？」
（使用言語フランス語、通訳付き）

■ GCOE大学院生派遣事業について

本年度より始まったGCOE「大学院生海外派遣プログラム」ですが、採用者が決定しました。

・鈴木球子（フランス文学、フランス）
・三好俊徳（仏教史、イギリス）
・吉田早悠里（文化人類学、エチオピア）

派遣された大学院生の報告もNewsLetterとWebで紹介する予定になっています。来年度の募集時期については未定ですが、NewsLetterとWebでもお知らせします。

■ 第２回オープンレクチャーの要約

第2回オープンレクチャーは11月14日（水）18時～19時に行われました。担当は釘貫亨教授（日本語学）です。

「日本人と漢字」
漢字は、中国から伝来したのであるから日本人にとって外国の文字である。漢字によって日本の土地や人の名を表すのに、音読みを借用して日本語音節を転写する仮名用法（能登、伊勢、麻呂など）が奈良時代以前に開発された。ここから平安時代に平仮名、片仮名が創出され、日本独自の文字が生まれた。漢文は依然として知的文章に使われたが、鎌倉時代以後、仏教僧が民衆教化のための文章に漢字片仮名文を用いた。漢字には多くの場合、振り仮名が付けられて、漢字が仏教を媒介にして大衆社会に流出し始めた。この趨勢は、中世社会を一貫したが、近世期には世俗的な娯楽本が数多く出版され、ここにも漢字に振り仮名が付された。その教育効果によって社会に漢字情報が浸透し、19世紀後半の日本は、世界に類例のないリテラシーの高さを実現した。漢字によって、押し寄せる西洋の科学、思想、制度の諸概念を翻訳できたことが日本の近代化に大きく貢献した。

■ 「テクスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

文学研究科で博士前期課程の大学院生を対象に「人文学先端研究（講義）」として開講されている「テクスト布置解釈学原論」（水曜4限）について、今回から授業の要約をお届けして行きます。

10月17日担当　佐藤彰一教授（西洋史学）
「封建制概念のテクスト論的脱構築のために」

「封建制」という用語が、歴史研究において最も重要な概念の一つであることは、誰も異論を唱えるものはいないであろう。もともとこの言葉は、西洋中世の「フューダリズム」を表現するために、中国古代の統治制度の類型を言い表す言葉から借用したものである。その制度的核芯にあるのは、主従関係形成の担保となった「封feudum」であり、封は家臣が主君への奉仕の対価として与えられる土地その他の利益を生み出す財貨のことである。封の授受の条件や、授受の法的効力などは時代により変遷があり、これら変化を含めた多様な要素の総体がいわば「封建制度」と称されるシステムである。

こうした説明から理解されるように、このシステムの核となっているのは「封」であり、この「封」概念は11世紀から13世紀にかけて北イタリアで編纂された『封建法書Libri Feudorum』において、初めて法概念として構築された。そして16世紀の一群の人文学者、法学者たちにより、この『封建法書』が再解釈され、現在我々が知るような形で確立した概念なのである。

やがてこの概念は啓蒙時代のヴォルテールの『習俗論』や、モンテスキューの『法の精神』などを通じて人口に膾炙し、1789年8月11日の有名な国民公会決議によって、歴史的な実体を具えた概念として定着した。カール・マルクスがこの概念を彼の歴史理論に巧みに取り込んで、世界史発展の基本法則を構築したことはよく知られている。それ以後、この概念が中世という時代を性格づける上で、なくてはならないものとなった。

だが翻って、『封建法書』以前に「封」の概念を用いた中世の人々が、果たして『封建法書』において13世紀の法学者たちが定義したような意味で「封」を理解したか否かは、実はそれほど自明とは言えないのである。

今回の講義は、封建制概念の生成に関する問題の所在と今後の研究の展望を示すに止め、『封建法書』の分析を手始めに、今後研究の進展に即して解明された問題を講ずる予定である。

■ GCOE研究合宿の報告

去る10月27日（土）〜28日（日）に三重県松阪市および津市にてGCOE推進担当者と研究員による研究合宿が行われました。初日は本居宣長記念館を訪問して資料調査を行った後、日本語学・釘貫亨教授の研究発表と全体での討議、二日目は講師にお招きした米国・マサチューセッツ工科大学教授の宮川繁先生による研究発表と討論を行いました。
小澤実・GCOE研究員による宣長記念館探訪記と、研究発表ご担当の先生による要旨を下記に掲載します。

宣長記念館探訪記
小澤　実

平成19年10月22日昼過ぎ、近鉄松阪駅に集合したわれわれ名古屋大学文学研究科グローバルCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」一行は、小降りの中タクシーに分乗し本居宣長記念館をめざした。

1730年伊勢松坂に生を享けた本居宣長は、日本特有の倫理的態度「もののあわれ」を導き出した国学者として知られる。故郷で先学賀茂真淵との衝撃的な出会いを果たした宣長は、医師として生計をたてながら『古事記』への注釈を35年にわたって継続した。彼はこの代表作『古事記伝』44巻のみならず、源氏物語の注釈書『源氏物語玉の小櫛』や古典対峙のエッセンスを詰め込んだ『玉勝間』等膨大な数の著作を今に残している。真摯な文献学的態度で古典に接した宣長は、日本におけるテクスト学の祖であるといってもよい。

本居宣長記念館は、このようなテクスト群がまさに生まれる過程を知覚できる贅沢な空間であった。『万葉集』や『古事記』の刊本の欄外にはカタカナ交じりの注釈がびっしりと書き込まれ、自らの著作には度重なる推敲の痕跡が認められる。圧巻は『天地図』であった。12世紀イタリアの修道士フィオーレの

ヨアキムの思考世界を図解した『形象の書』を想起させるこの『天地図』は、『古事記』に記される神話コスモロジーの図案化である。落手した『古事記』の刊本の読み込みとそこへの書き込み、その思考の在り方を筋道だてた『古事記伝』の稿本化、そして大量の注釈を消化しきれない人への教育的な配慮も含めた『天地図』による図解。宣長の思考がさまざまな形で現れるこのテクスト群の小宇宙は、参加者各人の人文学的好奇心に訴えただけではなく、「テクスト布置の解釈学的研究と教育」プロジェクトにとって貴重な示唆を与えてくれた。

二時間弱の至福の時を終えるとすでに雨はあがっていた。一行は宣長も踏みしめたであろう石畳をたどって再度松阪駅に向かった。

日本文法学における「文sentence」の規定の問題について

釘貫　亨

文法学は、19世紀に言語学が成立して以来、伝統的な各国語の規範文法から科学的な記述文法へと展開した。山田孝雄（1873〜1958）は、日本文法学における記述文法の確立者として高い評価を受けている。所謂「山田文法」は、文法学の観察対象である「文sentence」の定義に特色を持っている。山田は、従前の文法理論における文の定義が「あるまとまった意味と思想の表明」という類の説明に終わっていることに疑問を呈する。山田は、如何なる条件が整えば「まとまった意味と思想の表明」に達することが出来るのかという、より根源的な問いを発した。これは従来の文法理論に存在しないラジカルな提起であった。山田によれば文は、主語と述語との完備という形式的な側面だけでなく単語群を意味ある情報にまとめ上げてゆく精神的心理的な作用が必要であると考えた。そのような作用概念を山田は、当時最新の心理学説であったヴントの理論によって「統覚作用apperception」と呼んだ。統覚は、所定の規則によって並んだ単語（群）にひとまとまりの情報にふさわしい意識の注点に生ずる一回限りの作用であって、これがあって始めて文が成立すると考えた。しかし、統覚の原語Apperceptionは、山田が参照した元良勇次郎・中島泰蔵訳『心理学概論』（冨山房、明治32年1899）では、「明覚」と訳されており、山田はこれに従わず、桑木厳翼『哲学概論』（東京専門学校出版部、明治33年1900）におけるカント哲学におけるApperceptionの訳語である「統覚」の語を採用している。この事実は、山田の概念の由来がヴントに方法論を提供したカント『純粋理性批判』にさかのぼることを示すものである。このことは従来の日本語学では未報告である。

Unlocking Knowledge, Empowering Minds

宮川　繁

OpenCourseWare(以下、OCW)は現在Massachusetts Institute of Technology(以下、MIT)で実施されている2000科目の授業教材をWeb経由で無償で利用できる仕組みであり、MIT以外でも2007年現在で世界150大学が参加するグローバルな規模の教材公開のための枠組みになっている。本発表では、OCWの歴史をたどりつつその意義を確認し、OCWの活動を経て明らかになったimage readingの教育的な重要性を主張するものである。

1990年代後半に始まったいわゆるドット・コム・ビジネスの流れを受けてアメリカの各大学ではe-learning教材の販売を開始していた。1999年にMITでも同様のビジネスの可能性を探る委員会が学内に設置され議論を重ねた結果、教材を販売するという教育倫理的な問題に加え、e-learning教材の販売がビジネスとして必ずしも成功していなかったという経営上の問題もあり、MITとしては全く新しいモデルを高等教育の分野に提示することを決定した。OCWの利用者は学生だけでなく教員や独学者などで毎月200万以上のアクセスを記録しているが、利用者を対象とした事後的なアンケート調査によると閲覧者の66%は学士以上の学位を有しており、現在公開されている教材の質の高さを伺うことができる。またMITでは高校生の大学進学の判断材料にも大きく貢献していることが分かっている。

OCWが提供する教材の多くは画像などを豊富に使っているという特徴があるが、こうした画像を無償公開という枠組みで利用するためには著作権等の問題をクリアしなければならない。教材のデジタル化と著作権の確認は、OCW事業の1/3を占める重要な課題である。しかし画像を用いた教材を読み解くための方

法論はまだ確立していないため、名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラムの独創的な研究とその成果に大いに期待しているところである。開発された方法論に基づいた教育が実施されることで、画像を前にして国家間の歴史認識の相違などに由来する不用意な衝突も避けることができるであろう。

次回のメール版NewsLetterの発行は12月中旬を予定しています。

・・・…━━━…・

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.2
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2007 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

・・・…━━━…・